

聖書：ローマ 8：5～13

説教題：御霊によって、生きる

日時：2020年5月31日（ペンテコステ朝拝）

昨年ペンテコステ礼拝では8章1～4節を見ました。今日はその続きの箇所を見て行きたいと思います。なぜこのローマ書8章を取り上げるかと言えば、この章には聖霊についての言及がたくさん出て来るからです。1～30節までの間に聖霊を指す表現は何回出て来るでしょう。何と19回も出て来ます！ですから2節に1回以上は出て来ることとなります。ご存知の通り、このローマ書8章はキリストにある者たちの勝利が高らかに歌われている箇所です。聖書の最高峰と言っても良いような箇所です。そこに聖霊についての言及が多いということは、いかにクリスチャンの確信と勝利に満ちた信仰生活に聖霊についての正しい理解が欠かせないかということになります。

まず5～8節に書いてあることは、人の生き方には2つあるということです。一つは「肉に従う」生き方、もう一つは「御霊に従う」生き方。「肉」とはご存知の通り、聖書では墮落した状態における人間性を指す言葉として使われています。生まれながらの罪の下にある人間の状態のことです。その状態と御霊の下にある状態とは、何と大きく異なるかがここに対比的に述べられています。まず5節：「肉に従う者は肉に属することを考えますが、御霊に従う者は御霊に属することを考えます。」 「肉に従う者」の状態は、信仰を持つ以前の自分の状態を振り返ってみれば分かります。私たちはその時も色々なものを求めて生きていました。ある人は健康を第一として、またある人は快適な生活のためにお金を稼ぐことを目的として、またある人は快樂を求めて、ある人は美味しいものを食べることを楽しみとして、ある人は趣味のために、またある人は性的な快樂に引きずられて、またある人は社会的地位や名声を求めて、・・・。私は何もこれらがみな悪だと言っているわけではありません。健康もお金も快適な生活も性もこの世の地位も神が備えたもうものであり、本来は良いものです。しかしその中心に「神」がないために、すべてが歪んでいた。神の代わりに罪深い自分を中心に置いて物事を考えるため、その考えはすべて自分の罪に彩られたものとなり、また罪深い自分を満足させようとする活動となり、結果的に一時的で、永遠には価値の残らない空しいあり方でした。その一方、御霊に従う者は御霊に属することを考えるとあります。御霊に属することとは何でしょうか。御霊の思いは何よりも御霊が書いたもの、「聖書」にはっきり示されています。その聖書には神について、神の御心について、神が良しと

されることについて書かれてあります。また御霊の主要な働きは特にキリストを示すことです。ですから御霊に従う者は聖書を通してキリストについて、そのみわざについて、そしてキリストにあって神が備えてくださった救いと新しい生活について第一の関心を向ける人になります。

この二つの生き方がもたらす結果が6節に対照されています。まず「肉の思いは死」とあります。その理由が7～8節にあります。「なぜなら、肉の思いは神に敵対するからです。それは神の律法に従いません。いや、従うことができないのです。肉のうちにある者は神を喜ばせることができません」と。肉の思いは神に逆らい、神を無視し、神から離れる歩みへと導きます。そういう人に待っているのは「死」でしかありません。この世においてすでに霊的な死の状態にあり、やがて肉体の死を迎え、さらにその先に永遠に神と全く関係のない者とさせられるという永遠の死があります。一方、御霊の思いはいのちと平安です。御霊はキリストを通して神との交わりに私たちを回復させることを通して、私たちをいのちへ導きます。またそこには平安が伴います。かつては神から離れ、また神のさばきを恐れていた私たちでしたが、キリストを通して神との平和に生きる者とされたことによって、私たちの心には大きな平安が支配するようになりました。たとえこの世で一時的にどんなことがあっても、神が私を守り、支え、永遠のいのちに導いてくださる。そのことを知ることから来る、この世で経験したことがないような平安に生きる者とされました。さらには神ご自身が内に持つておられる「神の平安」と呼ばれる平安を知る者とされました。

さてパウロはこうして「肉に従う者」と「御霊に従う者」を対比的に述べた後、9節以降でこの手紙の読者であるローマのクリスチャンたちに向かって語りかけます。「しかし、あなたがたは肉のうちではなく、御霊のうちにいるのです」と。ここに私たちが今朝、しっかり受け止めるべき大切な真理が語られています。それは私たちは御霊のうちにいるということです。パウロは二つの生き方を対照して来ましたが、クリスチャンには「肉に従う人」と「御霊に従う人」とがいるというようなことを言うてはいません。9節のポイントは「あなたがたは肉のうちではなく、御霊のうちにいるのです」ということです。これが9節の原文でまず最初に記されている言葉です。そしてその後「もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら」と続いています。この「もし～なら」という言い方は、パウロがこのことに幾らかでも疑いを持っていたという意味ではありません。私たちもたとえば、男である人に対して「もしあなたが男なら、云々」

などと表現する場合があります。その意味は通常、「あなたは男かどうか、良く分からないが」という意味ではありません。むしろ「あなたは男なんだから」という意味で「もしあなたが男なら」という表現を使います。それと同じです。パウロはここで「神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるのだから」と言っているのです。それをもとにして彼が「あなたがたは肉のうちにではなく、御霊のうちにいる」と言っているのです。クリスチャンはこの二つの状態を行ったり来たりする人ではなくて、今や決定的に「御霊のうちにいる」という状態に導かれた人です。この新しい支配へと移された人です。これをしっかり受け止めることが、このローマ書のメッセージを理解し、そこに生きるためのカギとなることです。

さてその私たちについて、このペンテコステの日、心に留めたいことがここに二つ言われています。一つは御霊が私たちのうちに住んでおられるということです。私たちはこのことを教理としては聞いたことがあり、頭で知っているでしょうけれども、そのことを果たして実際に信じているのでしょうか。聖霊の存在は信じていても、ともすると聖霊は私の外にいて、時々外から私に働きかけてくださる方のように考えていないでしょうか。しかしそうではないのです。9節後半に「もし、キリストの御霊を持っていない人がいれば、その人はキリストのものではありません。」とあります。パウロが言っていることは、御霊を持っていなければ、その人はキリスト者ではないということです。御霊抜きでキリストを信じ、クリスチャンになっている人はいません。I コリント 12章3節に「聖霊によるのでなければ、だれも『イエスは主です』と言うことはできません」とありますように、私たちがイエス様を信じ、主と告白しているなら、それはただ御霊の働きによります。御霊こそ、私にキリストの素晴らしさを示し、霊の眼を開け、その心を説得し、キリストを信じるようにと導いてくださった方です。その御霊は、キリストを信じる私のうちに確かにおられるのです。

そしてもう一つ、御霊がうちに住むことによって私たちに生じていることが 10～11節に語られています。それは一言で言えば、いのちの力が死すべき私たちのうちに働いているということです。10節に「からだは罪のゆえに死んでいても」とあります。人間は本来、死ぬべきものとしては造られていませんでした。人間は神とともに永遠に生きるべき者として造られました。しかし罪を犯したことによって、この世界には死が入って来ました。これは罪に対するさばきです。これはクリスチャンになっても免れることはできません。私たちのからだは死ぬべき運命にあります。しかし「御霊が義のゆえに

いのちとなっています」とあります。「義のゆえに」とは、キリストを信じて私たちが神の前に義と認められたことを通してということです。神と正しい関係に立たせていただいたがゆえにということです。その義のゆえに、死に向かうプロセスの中にある私たちのからだにおいて、御霊がいのちとなっていてくださる。そして 11 節では、この御霊の力によって、私たちはこのからださえも生かされる者にされるといことが言われています。11 節最初の「イエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら」という部分も、先ほどと同じように「その方が住んでおられるのですから」という意味です。私たちのうちにはイエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が住んでいます。とするなら、神はその御霊によって、キリストを死者の中からよみがえらせたように、同じように御霊によって私たちの死ぬべきからだも、死を凌駕する復活の命に生かしてくださるということです。これは何という素晴らしいニュースでしょうか！ 私たちは日々死につつあります。私たちのからだはだんだん老化して、毎日毎日死に向かって突進しています。しかしその私たちのうちには御霊が住んでおられます。この方が、キリストのうちにあってキリストを死からよみがえらせたように、同じように私たちのうちにあって、やがて死を打ち破り、私たちをいのちの祝福へ導くために働いておられるのです。このような素晴らしい御霊の祝福のうちに今日も生かされている私たちです。

そんな私たちへの実践的な勧めが、最後 12～13 節に記されています。私たちはただ御霊のうちにあることを感謝し、喜んでだけいけば良いのではありません。ここにそのような祝福に導き入れられた者たちの義務が語られています。言い換えれば、この恵みに対してふさわしく歩む責任があるということです。その義務とは、肉に従って生きるという義務ではありません。私たちは、その状態からはすでに解放されました。今なお不完全な者として、かつての肉の性質が残っていますが、だからと言って肉に従って歩む義務はありません。その言いなりになる必要性はありません。今や私たちの前にある義務は、御霊に従って歩むという義務です。この御霊に従う歩みとは具体的にどうすることでしょうか。御霊がうちにおられることを覚えて、その内なる声に聞いて歩むというような単なる神秘的な方向で考えてはなりません。ここに「からだの行いを殺す」とあります。これはどういう意味でしょうか。参考になるのは 6 章 12～13 節の言葉です。「ですから、あなたがたの死ぬべきからだを罪に支配させて、からだの欲望に従ってはいけません。また、あなたがたの手足を不義の道具として罪に献げてはいけません。むしろ、死者の中から生かされた者としてあなたがた自身を神に献げ、また、あ

あなたがたの手足を義の道具として神に献げなさい。」 私たちの罪の性質、肉の性質は、私たちの具体的なからだ、からだの各器官を通して現れやすい。その目、口、耳、手、足などを通して。それらの誘惑に負けないということです。それらに抵抗するということです。いや、ここでそれらを「殺す」と言われています。私たちが死ぬのではありません。そうではなく、相手を殺すのです。息の根を止めるために戦うということなのです。その具体的な例として、山上の説教のイエス様の次の言葉が思い起こされます。マタイ5章29～30節：「もし右の目があなたをつまづかせるなら、えぐり出して捨てなさい。からだの一部を失っても、全身がゲヘナに投げ込まれないほうがよいのです。もし右の手があなたをつまづかせるなら、切って捨てなさい。からだの一部を失っても、全身がゲヘナに落ちないほうがよいのです。」 これはもちろん、その通りにするというものではありません。目をえぐり取っても、心で姦淫の思いに屈することはあり得ます。イエス様が言っていることは、誘惑にあった時、まるで目をえぐり取ったかのようにして、それを見ない。それに目をつぶる。これが殺すことです。同じように誰かの悪い噂を耳にして、もっと教えて、もっと話して！と耳を向けることをしない。むしろ耳を切り取ったかのようにして聞かない。同じように、悪い言葉を出そうと動き始める口を閉じて、殺す。話させない。死に追いやる。また良くないことのために手を伸ばさない、さわらない。またそちらに足を向けない、そこに行かない。こんな難しいことができるだろうかと思います。しかし私たちの人間的な力によってではなく、「御霊によって」と言われています。すなわち御霊により頼み、御霊に祈り、御霊の力によってということです。この戦いのためにも、私たちは自分が今や御霊の支配の中にいるという状態にされている者であることを心から信じる必要があるのではないのでしょうか。「あなたがたは肉のうちではなく、御霊のうちにいるのです」というパウロの言葉をもう一度しっかり聞く必要があるのではないのでしょうか。そしてこの戦いのためには、5～6節で見た、御霊に属することを積極的に考えることが必要でしょう。コロサイ書3章2節に「上にあるものを思いなさい。地にあるものを思ってはなりません。」とあります。またピリピ書4章8節に「すべて真実なこと、すべて尊ぶべきこと、すべて正しいこと、すべて清いこと、すべて愛すべきこと、すべて評判の良いことに、また、何か徳とされることや称賛に値することがあれば、そのようなことに心を留めなさい」とあります。これらに思いを高く上げることを通して、この世限りの過ぎ行くものを捨て去り、それを断ち切る歩みが導かれるでしょう。

そうする者に与えられる素晴らしい祝福が、13節最後に記されています。それは、「あ

なたがたは生きています」ということです。今日の説教題は「御霊によって」の後に「、」をつけて「生きる」としました。もう少し良い題名は付けられないか随分悩みましたが、時間切れでこのタイトルとなってしまいました。もし「、」を入れずに「御霊によって生きる」とすると、どうでしょうか。それは単に生き方の問題を言っているように思われます。しかしこの13節が言っていることはそういうことではありません。ここで言われているのは、御霊によってこのように取り組む者に与えられる祝福についてです。それは「生きる！」という祝福です。これは、私たちのうちで「いのち」となっていてくださる御霊の祝福にいよいよ生きる者となることです。真の意味でのいのちに生きること、生き生きとしたいのちに生きることです。これこそ私たちが何よりも求めるべき、また私たちを何よりも深く満たす祝福ではないでしょうか。もし肉に従って生きるなら、その先にあるのは死です。神から離れていのちを失い、やがて死に至ります。しかし御霊により頼んでからだの行いを殺すなら、その先に待っているのは「いのち」です。私たちはそのいのちの祝福に今ここにある時から生き始めることができる。やがての永遠のいのちへとつながる、その前味としてのいのちの祝福を豊かに味わって生きる者へと導かれるのです。

このペンテコステの日、天に昇られたイエス様は御霊を遣わしてくださいました。その御霊は信者一人一人のうちに住んでおられます。私たちのうちにあって、死ぬべきからだを生かすために今日も働き、支えてくださっています。このことを信じて心からの感謝を神にささげたいと思います。そしてこのような恵みの下にある者たちとして、私たちには義務があります。それはからだの行いを殺すことです。それはかつての私たちには決してできなかったことですが、今や私たちは御霊のうちにいます。私たちのうちに住み、私たちの中で力強く働いている御霊の力の下にある者たちです。そのことを信じ、御霊に祈りつつ、この私たちのなすべきことに取り組みたいと思います。そしてその者に用意されている「生きる」という祝福、天国のいのちを先取りするいのちの喜びに御霊によってあずかり、益々救いの完成の日を目指して進む歩みへと導かれて行きたいと思います。